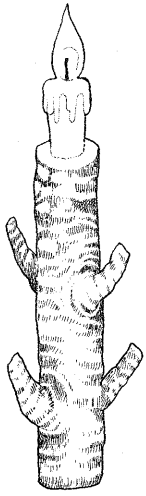
技あり！

―二歳児クラスの出来事より―

田辺　敦子



すてきな出会いがありました。「木」という題名の合唱曲で、その詩はこんなふうに始まります。

一本の木の中に
まだない　一本の木があって
その梢がいま
風にふるえている

未来への可能性を瑞々しく描いたこの詩の中に、ふと毎日保育園で向き合う子どもたちの〝あの顔、この顔〟が重なって見える気がしました。生気に満ちた若葉を揺らすしなや

かで躍動的な木は、くすぐったそうに笑う子どもたちの姿に、いかにもそっくりです。

この歌の中で思いを馳せた子どもたちの実際はというと、〝すてきな詩〟もびっくりするほど、本当に毎日多様な色模様を織り成しています。取り留めないと思いがちの一齣も、実はその中に、それまでなかった発見や気づきがあるのです。そしてその一齣一齣が、まだ見えない何かに通じる鍵になっていくのでしょう。

私にとって〝あの顔、この顔〟とは、今年三歳を迎える二歳児クラスの子どもたちです。私は今年になって、この子どもたちと、一体どれくらいの鍵を開けたことになるでしょうか。鍵やさんでも見分けられないウイットに富んだ不思議な鍵を。

さて、私の担当しているクラスには、男の子の双子兄弟がいます。好奇心旺盛なこの兄弟の、食事に懸ける思い、とりわけ果物に対する思い入れは大人もびっくりするほど深く、毎回食後に登場する果物に向ける笑顔はまぶしいくらいです。そんな二人に、大好きな果物を巡って、こんなことがありました。

「にがい」という味覚の表現を覚えた兄のKくんは、この言葉をどこかで使いたくてうずうずしていたようです。早速その実践は食事のひとときに試されました。食事を食べ終え、デザートのメロンを手にしたKくんは、なぜかこの日に限って甘い部分からではなく、固い皮の部分をかじり始めたのです。そしてちょっとの間を置いてから、少し笑みを浮かべつつ、半分しかめ顔をして、「このメロン、にがい！」と感想を述べました。

『やったー、言えた！』という思いでいっぱいだったのでしょうか、試みを終えたKくん

は、少しの間、実践の出来ばえを自ら味わっているようにも見えました。

もし、本来甘いはずのメロンを口にしながら「にがい」という子どもの姿そのものだけを見ていたら、私は一緒に笑いつつも、「まだ言葉の意味を理解していないのね」と判断してしまったかもしれません。でも、このとき上手だったのはKくんの方でした。何しろKくんは、甘いメロンの実を食べたのではなく、わざわざ固い皮をかじって「にがい」と言っていたのですから。こんな細かいところまでしっかり演出できるとは、なかなかの腕前です。これは技あり、というところでしょうか。

日常のほんの小さな流れの中に、このような楽しみを取り入れて、自らアレンジしたスペシャルメニューを味わおうとする子どもの姿は、本当にきらきらしています。

ところが、このメロンの一件は、意外な第二幕が展開されました。そう、双子の弟Nくんの登場です。

Kくんより一足早くメロンを食べ終えたNくんは、「にがい」と言い終えたにんまり顔のKくんを覗きこみました。そして、真面目な顔で「え？　これ、おいしいよ。メロンは甘いよ」という訂正を入れたのです。

さすがNくん、メロンは甘いものという誰もが認める事実を、タイミングよく指摘してきました。二歳児クラスでは、こういう小さな指摘が日常茶飯事に見られ、そのやりとり

から新しい発見や、新しい仲間関係の芽生えも見られます。もちろん初歩の段階ですから、幼児のようにうまくはいかず、まだまだ大人が両者の言い分をうまく整理して子どもに返していく事が往々にして必要になります。ただ今回の場合は、双子の兄弟同士ということもありますし、私自身もKくんの愉快な発想に関心を覚えたので、しばらく二人のやりとりに注目することにしました。

少し話がそれますが、乳児期から幼児期へと大きく飛躍していくこの時期の子どもたちは、『こうしたい！』という自我を強く抱く現実の自分と、『こうなりたい！』という理想の自己像とを常に同居させて、その両方の立場を行ったり来たりする時期のように思います。更に律儀なことに、日頃の自らの言動とは切り離してでも、仲間の振る舞いについては、しっかり客観的に、理想的自己像の見地から、そう思うところを主張します。これは本当に興味深く、面白い二歳児の姿といえるでしょう。自己を知り、他との関係の中から、またあらたな理想の自己像に出会っていく大事な時期です。大人と共に進んできた乳児期から、幼児期に向けて、子ども自身の手にゆだねられて行く橋渡しの営みが、二歳児クラスの生活の中で、とても大きなポイントとなっています。

話をメロンの舞台に戻します。さて、「これ、おいしいよ。メロンはあまいよ」と言った、この場合のNくんの発言は、ごく自然な成り行きでしたし、それほど強い主張ではありませんでした。けれども、さあいよいよメロンの実の部分と共に、自分の試みの成果をじっくり味わおうという矢先のこのような手軽なご意見に、Kくんも引き下がることはし

ません。「にがいんだよ」「これにがいの」と、アピールを続けました。

さて、それを受けたNくんの反応にはびっくりです。「ほんとに、これはあまいよ。ちょっとかしてごらん」と丁寧に言葉を添えたかと思うと、スルッとKくんの手からメロンを取り、自分の手の上に乗せました。そして、その次の瞬間、パクッと遠慮なくその輝かしいメロンを口にしてしまいました。「ほらあまいよ！　おいしい！」

そう言ったときのNくんのまなざしは、まるでいつも二人を励ましてくれるお母さんのようで、そのうえ「ほら」という、自信たっぷりの嬉しそうな笑顔がなんとも言えませんでした。

見ていた私も、まさかNくんまでもが実践でこれを証明するとは思っていませんでした。言葉だけでなく、行動でも示してくれるこの時期の子どもたちの律儀さにおそれいります。それにしても、このタイミングと言い、誇らしげな笑顔と言い、今度はNくんに一本取られました。当のKくんも、無事に帰った『少しかけているメロン』を手にし、一緒になって笑っていました。「お味はいかが？」と聞く私の問いに、「おいしい！」とはにかむKくんの笑顔も印象的です。

このような小さな出来事も、子どもたちにとっては本当に大きな冒険であり、いつも精一杯の自分を出して、それらと向き合っているのです。それらの冒険を、しっかり子ども

たちの豊かな成長として返していく為には、やはり私たち大人も、保育者としての保育観や子ども観をしっかり持つと同時に、子どもたちと一緒に、いつでも子どもの世界を旅できるゆとりを持つことが必要なのでしょう。

冒頭で紹介した合唱曲「木」の中に、次のような一節があります。

一枚の青空のなかに
まだない　一枚の青空があって
その地平をいま
一羽の鳥が　突っ切って行く

この青空は、時として一人一人の子どもたちの姿を重ねていった色鮮やかな空になることでしょう。また別のときには、子どもという一羽の鳥が、安心して広い空を飛べるように、保育者自身も青空の一部を成すことがあるでしょう。そして、ときには各々の子どもが各々の青空を成して、自分らしい色の空の中で、心地よい飛行を楽しむこともできるでしょう。

どんどん大きくなっていく豊かな木のように、絶えず表情を変えていく広い青空のように、子どもたちからあふれだす笑顔で、澄んだ泉がわきますように。

（かしのき保育園）